

で、著明な肝腫大と肝右葉外側に space occupying lesion の存在が認められ、肝癌と診断した。死亡1週間前の同様の肝シンチグラムで、右葉外側の space occupying lesion の存在とともに頭蓋、胸髄、腰髄、骨盤など骨髄細内系と肺への RI の著明な集積が認められたが、脾への集積は軽度であった。剖検では、肝重量は 1,850 g まで腫大していたが、肝シンチグラムで defect を若起せしめるような腫瘍は全く認められず、組織所見で高度のアミロイド沈着が認められた。その他脾、腎におけるアミロイドの沈着も高度であった。

この症例の場合、肝シンチグラムでの focal defect は、アミロイドの沈着により生じたと考えられる。また骨髄、肺への RI 異常集積は、肝、脾におけるアミロイドの高度沈着によりこれらの臓器取り扱いがきわめて低下したため生じたと考えられる。

46. 肝シンチグラムと肝 CT 像について

河合 武司 前田 裕子
小川 翼 西上 英昭
福田 徹夫 金崎 美樹
赤木 弘昭

(大阪医大・放)

目的：肝シンチグラムと、肝 C.T. スキャン像の比較検討を行なった。

使用装置および方法：シンチカメラは、中央演算処理装置を接続したガンマーカメラを用い、3方向から撮影しました。C.T. ホールボディスキャンは、EMI, C.T. 5005/12 を使用しました。スキャン時間は1スライス20秒、1検査8スライスでスライスの厚さは13mmです。記録は6つ切りフィルム、ポラロイド写真にて行ない、読影は、IVC および写真にて行ないました。

対象：1977年2月8日から6月16日の約4か月間に行なった C.T. スキャンは 879 検査あり頭部 586 検査 66.7%、肝臓 58 検査 6.6% でした。後者の内、肝シンチグラムを行なった 34 例を対象

としました。

結果：肝シンチグラムで Space Occupying Lesion (S.D.L.) と読影した 18 例の内、6 例は C.T. スキャンでも異常は認めず経過観察中です。肝シンチグラムで S.O.L. と読影できなかった 17 例中 2 例は、C.T. スキャン Cyst と読影可能でした。

結論：肝シンチグラムは、肝全体の形態的な観察と、C.T. スキャンの位置づけには有利でした。C.T. スキャンは、Cyst と実質性腫瘍の診断には、有利な検査法と考えます。今後、肝臓病変の診断は、肝シンチグラムと肝 C.T. スキャンの総合的診断により、向上するものと考えます。

47. 骨シンチグラフィーにおける肝の描出について

越智 宏暢 中塚 春樹
中村 健治 玉岡 紅一
佐藤 守男 池田 穂積
浜田 国雄 玉木 正男
(大阪市大・放)

^{99m}Tc-EHDP を用いて 1日 4~5 例の骨シンチグラフィーを行なっているが、過去 1 年間に 3 症例において肝がつよく描出された。それら 3 症例について肝機能検査、血液の電解質などには異常がみられなかった。原因を検討したところ、3 人の患者に静脈注射を行なう際非常に困難で、何度か失敗し最終的に注入された時には注射器内に血液が混入して赤色を呈した状態であったことが原因であろうと考えた。そこで、家兎を用い ^{99m}Tc-EHDP と血液をあらかじめ混ぜ、振盪した後に静注するとすべての家兎において肝がつよく描出した。^{99m}Tc-pyp. についても同様のシンチグラムが得られた。屠殺後の臓器分布をみると、肝、脾、骨髄の分布が正常群のそれらに比し数倍多いことがわかった。網内系組織に多く集積していることから、in vitro において何らかの作用でスズコロイドができるものと考えられる。